

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 27 日現在

機関番号：12614

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2011～2013

課題番号：23401041

研究課題名(和文) インドネシア共和国、バンカ島の海洋人類学調査

研究課題名(英文) The Marine Anthropological Research around Bangka Island, Republic of Indonesia

## 研究代表者

岩淵 聡文 (Iwabuchi, Akifumi)

東京海洋大学・海洋科学技術研究科・教授

研究者番号：80262335

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 6,800,000円、(間接経費) 2,040,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、インドネシア共和国西部のバンカ島とその周辺島嶼部を中心とする海域に分布する漂海民セカ族を主たる対象として実施された海洋人類学調査である。セカ族については本格的な調査が人類学者の手によって実施されたことはなく、本調査によりこれまで知られてこなかったセカ族の文化徴表が世界で初めて、民族誌上に登場することになった。本調査が開始された段階で、セカ族の全人口は約900人である。セカ族全体は、それぞれが儀礼集団となっている5部族に分かれ、各部族は10隻強の家船から成る数バンドにより構成されている。関係名称体系は典型的な無系型で、婚姻は厳格な単婚である一方、祭りや儀式の際には歌垣と乱婚が行われる。

研究成果の概要(英文)：This study is a marine anthropological research, mainly, upon the sea nomad of Sekak, who lives over the waters around Bangka island and its neighbouring isles of western Indonesia; it is the world-first ethnographical research by a professional anthropologist. Because no proper investigation among the Sekak had not been done since the colonial times by scholars, nobody knew detailed cultural traits and social facts of the Sekak. My collected data gives the population of the Sekak approximately at 900 in 2011, when I started doing my field work in Bangka island. The whole inhabitants are divided into five tribes or ritual units, each of which consists of several bands or flotillas. Usually every band has more than 10 houseboats. The relationship terminology is typical non-linear and strict monogamous marriages are widely observed among the Sekak. During rituals or ceremonies, however, they conduct verse exchanges and primitive promiscuities.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学

キーワード：社会人類学 民族誌 東南アジア 漂海民 乱婚 歌垣

### 1. 研究開始当初の背景

(1) インドネシア共和国の西部、ジャワ島とスマトラ島にはさまれたジャワ海に浮かぶバンカ島は、古くから東西海上交通路の要衝となっていたばかりではなく、海岸マレー人の根拠地あるいは漂海民オラン・ラウト集団の南限地として独自の文化をはぐくんできている。しかしながら、東隣のピリトン島を含めて、この地域では植民地時代の早い時期から錫の採掘が始まり、これまでバンカ島の研究と言えば、錫鉱山の歴史だけにもっぱらその関心が集中していた。その文化についての記録は、すべて断片的なものにとどまっている。

(2) バンカ島およびその周辺の島嶼部においては、これまで当該地域の文化を対象とした本格的な海洋人類学調査が実施されたことはなかった。とりわけ、周辺海域に分布する漂海民であるセカ族の調査は行われてきておらず、その実態は全く不明であった。本研究は、世界初のセカ族を対象とした人類学フィールド・ワークである。他の東南アジアの漂海民に関する研究が近年では集約されてきている点などを考慮すれば、セカ族についての知識を世界のどの人類学者も共有していないという状況はきわめて異常なことである。

### 2. 研究の目的

(1) 本研究の第一の目的は、バンカ島およびその周辺部に認められる海洋文化の主たる担い手である漂海民であるセカ族の民族誌上の諸徴表、あるいは社会的事実を明らかにすることである。西部インドネシアにおける民族誌の間隙を埋めるという作業も重要ではあるが、他のオラン・ラウト集団に属する漂海民や東南アジアの他の漂海民との比較という視点や、その独自の文化の通文化上の評価という側面もこの研究の目的に含まれるものである。

(2) バンカ島およびその周辺部における海洋文化の担い手はセカ族だけではない。当該地域の海岸マレー人も、小規模であるが独自の海洋文化を維持してきてはいる。セカ族およびその文化や言語が消滅寸前という現状から、調査の第一対象はセカ族に集中せざるを得ないが、セカ族の文化もその中に含まれるバンカ島全体の海洋文化の全体像を将来の再調査につなげられるような形で、できる限り明確化していくという方向性が本研究の第二の目的である。セカ族の文化にしても、周囲の海岸マレー人のそれと全く無関係に形成されてきたものではない。

### 3. 研究の方法

(1) 人類学調査は、海洋人類学調査であれ社会人類学調査であれ、基本的な方法は参与観察による民族誌資料の収集である。具体的

には、セカ族あるいは海岸マレー人のインフォーマントとラポールを確立した上での緊密なコミュニケーションを通じて、時としては、その現場の作業にも共同参画しながら、必要な人類学的情報を集約するものである。幸いなことに、セカ族、海岸マレー人を問わず、地元の人々とラポールを形成することはそれほど困難なものではなかった。使用言語は、海岸マレー人とは基本的には国語であるインドネシア語(マレー語)であったが、後半にはマレー語の一方言であるバンカ方言が使用された。セカ族とのコミュニケーションではセカ語の使用が基本であったが、セカ語もマレー語の一方言の一種であり、今日ではかなりのセカ族の人々がインドネシア語にも堪能である。

(2) バンカ島においてフィールド・ワークを実際に開始してから認識された点であるが、バンカ島およびその東のピリトン島においては、早くから植民地勢力による錫鉱山の開発が行われてきた。このため、文化変容の影響も著しく、これは地元の海岸マレー人文化だけではなく漂海民のセカ族の文化にも顕著に観察できる。歴史的な変遷を考察するには、当然のことながら、歴史史料の分析を実施しなければならない。ところが、現地には歴史文書の集積はほとんどなく、その大部分は旧宗主国であるオランダの研究所などに所蔵されている。したがって、本研究においても、総収となる段階では、オランダにおいて文献研究が実施された。

### 4. 研究成果

(1) セカ族の全人口は、約 900 人である。しかしながら、この内で固有の言語であるセカ語を話すことが出来る人々は4分の1以下である。セカ族全体は、5部族に分けられている。西から、バンカ島周辺部の3部族、すなわち、クラバット湾集団、スムジュール島集団、レパール・ポンゴ集団、とピリトン島周辺の2部族、すなわち、タンジュンパンダン集団とガントン・マンガール集団である。それぞれの部族あるいは集団は、儀礼単位を形成しており、部族単位での大規模な儀礼を催行する。もっとも重要なものは、年1回開催される豊漁儀礼と葬送儀礼である。その際には、他のすべての部族の成員も招待され、セカ族の全成員が、理念的には、全員集合するということになる。各部族あるいは集団の儀礼場は、クラバット湾集団がル岬、スムジュール島集団がスムジュール島、レパール・ポンゴ集団がクンプン村、タンジュンパンダン集団がアラック浅瀬、ガントン・マンガール集団がチナ浅瀬である。

(2) それぞれの部族あるいは集団は、いくつかのバンドあるいは船団により構成されている。このため、社会生活の上では、部族の長よりもバンドの代表の方が重要な役割

を演じている。各バンドは、10隻強の家船により構成されていたが、今日では家船ではなく、海岸部に作られた複数の杭上家屋あるいは陸上家屋に、バンドの成員が近隣関係を結びながら共住している。日常生活において重要な単位となっているのは各家船であり、その成員は原則として核家族により構成されている。かつて、それぞれの家船には、必ず一羽以上のクロサギが飼われていた。伝統的には傷害漁具のみによって行われてきた漁労活動は、バンド単位というよりもむしろ家船単位、すなわち核家族単位で実施されている。

(3) セカ族の社会構造は、典型的な無系型のそれである。出自集団は存在せず、相続も双方向的に行われる。無系型の特徴は、その関係名称体系に象徴的に表出されている。エゴより+3世代は名称は *datuk* 呼称は *atok*、+2世代は名称は *nenek* 呼称は *nek*、+1世代は直系の男性が *mak* 女性が *nok*、傍系の男性の名称が *uwak* 女性の名称が *amay*、傍系の男性の呼称が *mak* 女性の呼称が *nok*、同世代の年長者の名称が *kakak* 年長者の呼称が *akak* 年少者が *adik*、-1世代が *lorok*、-2世代が *cucuk*、-3世代が *cicet*、である。

(4) セカ族の婚姻はバンド外婚が基本である。配偶者には、遠隔の部族出身者も比較的多く、大規模な儀礼が配偶者獲得の大きな機会となっているという事実によるものである。厳格な単婚であるが、離婚は頻繁である。海上での日常生活という特殊性から、夫婦間の強固な絆が求められ、これに適さない配偶者の排除が簡便に行われる。一方、全セカ族単位あるいは部族単位、バンド単位で行われる儀礼の際には、乱婚が広く行われる。そのため、生物学上の父親は全く問題とされず、社会上の父親のみが社会で認知されている。養子慣行も普遍的である。

(5) セカ族の間では積極的な冗談関係は見られないが、厳格な忌避関係が観察できる。男性エゴとその兄弟の配偶者間、女性エゴとその姉妹の配偶者間、男性エゴと配偶者の母親間、女性エゴと配偶者の父親間、男性エゴと子供の配偶者の母親間、女性エゴと子供の配偶者の父親間、に忌避関係が存在する。この関係は、名称による関係に拡大される場合もあり、乱婚の際にもこうした関係者間では性的な結びつきは忌避される。

(6) セカ族の儀礼あるいは儀式は、すべて3つの段階を経て催行される。第一段階ではまず、シャーマンが霊媒に海の精霊を憑依させる。治療儀礼などの場合には、シャーマンが霊媒を通じて精霊から種々の情報を聞き出すという場ともなる。第二段階は、音楽と舞踏のパフォーマンスで、男女が単独あるいは集団で音楽に合わせながら舞踏を披露する。

セカ族の音芸好きは、すでに戦前のオランダ語文献にもその報告があるが、使用される楽器は単純で、太鼓と銅鼓のみである。第三段階では、詩歌の交換が一对のあるいは複数の男女間で行われる。交唱歌の交換である「歌垣」の一種である。この交換を通じて、交換ゲームに負けた相手あるいは気の合った相手と、その後に自由な性的交渉が行われる。既婚者未婚者の区別はなく、セカ族以外の海岸マレー人でも性的な遊戯という目的で、このセカ族の詩歌の交換に参加する者もいる。こうしたセカ族の乱婚は、バンカ島あるいはピリトン島に居住している海岸マレー人の間では広く知られており、「あなたは私の夫と連れて行き、私はあなたの夫を連れて行く。家船に帰ってきたら、あなたはあなたの夫を連れて行き、私は私の夫を連れて行く」という誰でも知る諺の中に良く表現されている。しかし、この格言には必ずしも正確ではない部分もあり、夫婦交換だけが行われる訳ではない。

(7) セカ族の儀礼の際には、服装倒錯者が重要な役割を演じている。服装倒錯者は男性であるが、ジェンダーは女であり、舞踏などの際には、女組の一員として活躍する。これは、セカ族の儀礼体系とその背後にある神話とに密接に関連しており、その体系を支配しているのが3分法に基づく独自の世界観である。セカ族にとってもっとも重要な海の精霊は、父なる精霊であるリンガ諸島出身のブジャン・アワン、母なる精霊であるリアウ諸島出身のダヤン・イナ、バンカ島周辺の海で拾われた養子の精霊であるが、この子の精霊の名前や性別は誰も知るところではない。しかしながら、こうした精霊たちと関係づけられる他の要素を観察していくと、この子の精霊の中間的で曖昧な存在という側面が浮かび上がってくる。セカ族にとって、最重要の海の精霊であるこの子の精霊の実社会での権化が、服装倒錯者である。

(8) セカ族に関する歴史史料は現地においては皆無に近いが、個人史の情報が入った一文書の発掘が行われた。すなわち、中国人との混血のセカ族であったアシン・バハリ氏(1918 - 1997)が書き残した「アシン・バハリによるピリトン島の漂海民」である。この手稿の内容は大きく二つの部分に分かれ、前半の一頁から五〇頁までがセカ族の文化と歴史についての記述、後半の五一頁から六一頁までがその少年時代の個人史に関する記録である。前半部分には本人の思い込みや誤解に基づく誤った記述が散見されるが、後半の部分は事実関係の記録に徹しており、出生から8歳までという短期間のみの個人史となってはいるが、漂海民の幼少時代の記録としては世界ではほぼ唯一のものである。この文書からは他に、セカ族の養子慣行や初期のオランダ人との関係も読み取ることができる。

(9) 「セカ」という名称については、確実な語源は不明である。民俗語源がいくつか語られており、オランダ時代にはセカ族の家船が好んで係留していた「浅瀬」というマレー語の単語と関連づけられてもしていた。今日、「セカ」という語が蔑称であるという誤解から、セカ族をサワン族と呼ぶ現地の人々も登場してきている。しかし、これは 1967 年に地元政府により作られた造語で、「サワン」とはセカ語で「海」を意味する。このため、「セカ」の語源が男性性器であるというような事実無根な噂がピリトン島を中心に流布されてきている。

(10) バンカ島およびその周辺の島嶼部における海洋文化の主たる担い手は漂海民のセカ族ではあるが、地元の海岸マレー人もその一翼を担ってはいる。しかしながら、その文化はセカ族のそれとは大きく異なっている。伝統的な当該地域の海岸マレー人の漁労活動の特徴づける文化徴表は、定置漁具と泥質干潟地帯で使用される潟板である。セカ族はこの両者を全く使用しない。イラヌン族の襲撃などもあり、この海域における海岸マレー人の海における活動は歴史的にかなり限定的であったものと推定できる。

(11) セカ族も植民地時代以来、外部からの影響を受け続けている。セカ族が伝統的に潜水漁に従事していたことから、水中文化遺産の探索にセカ族が駆り出されるという同時代的な問題が地元で発生してきている。インドネシアの新しい 2010 年に制定された文化財保護法によれば、バンカ島周辺に分布する水中文化遺産も政府の管理下にあるが、その保護保全はまだ始まったばかりである。

## 5. 主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕(計 2 件)

岩淵聡文、インドネシアの水中考古学、季刊考古学、査読有、123 号、2013、94 - 96

Akifumi Iwabuchi、Maritime Southeast Asia:How to See and How to Study、Proc. of the International Conference on Malay Excellence II、査読有、CR-Rom、2013、1 - 10

### 〔学会発表〕(計 2 件)

Akifumi Iwabuchi、Maritime Southeast Asia:How to See and How to Study、The International Conference on Malay Excellence II (招待講演) University of Malaya、11-12 September 2013.

岩淵聡文、潟板あるいは泥橇について、日本海事史学会例会、東京大学、2013 年 11 月 30 日

### 〔図書〕(計 0 件)

### 〔産業財産権〕 出願状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

### 取得状況 (計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

### 〔その他〕 なし

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

岩淵 聡文 (IWABUCHI, Akifumi)  
東京海洋大学・大学院海洋科学技術研究  
科・教授  
研究者番号：80262335